
俺は銀河を救えるか？

神城匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は銀河を救えるか？

【Nコード】

N2734BA

【作者名】

神城匠

【あらすじ】

ありがちな異世界転生モノ。「僕たちの世界を救つてよ。英雄になつてよ」という可愛らしいネズミの誘い文句に頷いた不良少年は、とある銀河系の小さな惑星国家ヴェスパニア王国に暮らす一般市民サンジュスト家に転生した。戦乱続く銀河系、滅亡寸前のヴェスパニアで、彼は英雄となり世界を救うべく、行動を開始するのだった。この物語は、チート要素、ご都合主義、ハーレム、残虐シーンなど含みます。

第0話 世界を救ってよ（前書き）

この作品は、現代地球で暮らしている少年が異世界に転生し、英雄として活躍していく物語です。異世界とは即ち、地球が属する宇宙とは別の宇宙、別の銀河系になります。

もしも、あなただったらどうしますか。普通に暮らしていて、そこへいきなり「僕たちの世界を救ってくれ」などと言われたら。具体的な説明もなく、生命の保証もなく、ただこちらの世界に来て、自分たちを助けてほしい、英雄になってほしいと言われたら。私だったら、速攻断るような気がしますが、一方で行ってみたい気もある。でも英雄になって本当に幸せなのか。平凡な日常よりもスリルある非日常のほうが本当に楽しいのか。それを考えてみたくて、小説にしてみました。

第0話 世界を救ってよ

「ねえ、君の力を貸してよ。君の力が要るんだ。僕たちの世界を救ってこないかい？」

ある日、突然現れたマスコット人形のような可愛らしいネズミは、そんな風に言って少年の度肝を抜いた。

「別に難しいことじゃないんだ。うん、って頷いてくれれば後は僕たちが万事全て整えるからさ。僕たちを助けてよ。救ってよ」

と、ネズミは言った。

それは、家の屋根裏とか、店の片隅に巣食っている薄汚いドブネズミとは違って、透き通るようなさらさらな白い毛並み特徴的な美しいネズミだった。少しだけ大きめなハムスターといったほうが妥当だろうか。いや、それ以上に何より、どこからどう見てもネズミの範疇を超え得ない小動物が平然と人語を操っている事実。少年は驚きの表情を隠せないのだった。

とはいえ、問われた以上、答えてやるのは人としての義務とか常識なわけで……。まあ、なにか気の利いた答えを返そうと決意するより前に少年の口からは、

「は？」

そんな疑問詞が自然と飛び出していたのだが……。

「い、いや、何言っただか全くわかんね。ってかお前なに？ 何で喋ってんの？ いや、俺、夢でも見てんのかな？ 幻でも見てんのかな？ うわあ、いよいよ俺終わりだ。いろんな意味で終わった」

頭を抱え、呆然と立ち尽くす少年。

ネズミに限らず人間以外の存在が人語を操るなどというメルヘンチックな世界からは、十年近くも昔に卒業したはずの彼には、目の前の光景、現実が理解できない。というよりむしろ理解しなくなかった。

「うーん、まあ幻でも夢でもなくて現実なんだけど。……でも、面白いと思うよ。楽しいと思うよ。怖いけどスリルはあるけど、変哲のない人生を何気なく過ごすよりはよっぽど有意義だと思うよ。何しろ君は、英雄になれるんだから。世界を救う勇者様になれるんだから。だからさ、力を貸してよ。その特別な力を僕たちのために使ってよ」

ネズミは、そう言っただけで笑った。

少年は困ったような顔をして、きょろきょろと辺りを見回している。

もしかすると、ドッキリ？

芸能人でも有名スポーツ選手でも政治家でもない自分にドッキリ企画を仕掛けるようなテレビ局もないだろうが、可能性としてはもはやそれしか考えられない。そうだと考えれば、喋るネズミも、やたら金のかかった玩具であると説明できる。

そうだ。ドッキリだ。

そう思い、少年は何度も何度も周りを見回すが、しかしカメラらしいものは何もない。

「ち、力ってなんだよ。特別な力って別に俺は何にも持ってない。……俺はどこからどう見ても、ただの不良以外のなにものでもねーんだよ」

本来、今は授業中。それを完全にサボって、こんなところでうるうるしている以上、優等生ではあり得ない。金色に染め上げた髪の毛を逆立て、着崩した制服に身を包み、改造したバイクを自由自在に乗り回している、絵に描いたような不良だ。

決まり切った人生と、それに対して何もできない自分という存在に嫌気がさして、社会に対して突っ張っているバカなガキ。

こんなバカに、特殊な力などあるはずもない。

そんなことは誰に言われるまでもなく分かっているのだ。それなのに、このネズミは、何を寝ぼけたことを言っているのだろうか、少年は心の底から思ったが、ネズミはどうも本気のようにだった。

「君には力があるんだよ。そうでなければ、僕は君にこんな頼みごととはしないよ」

「……そりゃそうだろうけど、具体的にどんな力が俺にあるのかって聞いてんだよ！」

少年の問いに、しかしネズミは薄笑いを浮かべるだけで答えようとはしない。

「……まあいいや。で、具体的には何をやればいいんだよ」

もしもこんな提案を普通の人間がしてきたとしたら、バカげた話と一蹴していただろう。だが、何しろ目の前にいるのは、どこからどう見てもネズミでしかありえなかった。あり得ない非現実的存在から、非現実的な話を振られたのだ。もはや一笑にふすわけにはいかない。少なくとも話を聞く価値ぐらいはあるだろうと、彼は思っ

た。

少年は考える。

元々、こちらの世界にそれほど未練があるわけではない。

くだらない日常の連続に辟易していたところが、確かに彼の心の中には存在するのだった。だからこそ、彼はアウトローを気取って、今も学校をサボって近所のコンビニで悪ぶっているのである。いっそ、ネズミの誘いに乗って、彼らの世界とやらを救ってやるのも悪くないかもしれない……などと思ってしまったのが、少年の運のつきであった。

彼が軽々しい気持ちで頷いた瞬間、

突如、辺りの時間が完全に停止してしまったようで、それまで忙しなく動き回っていたビジネスマンたちがピクリとも動かなくなつた。それなりのスピードですつ飛ばしていた自動車や電車、自転車もブレーキ一つかけた形跡もないのに、その場で完全に静止していた。

「な、なんだ、これは？」

驚く少年。

「な、なにがどうなってるんだ？」

彼は呆然と立ち尽くす。

現実と非現実の間にあつたはずの絶対的な壁が、今まさに音を立って崩れ落ちた。

そんな感じ。

「じゃ、行くよ。あ、ただね。一つ言い忘れていたけど、君を僕達の世界に招くには、その体はちょっと大き過ぎるんだよね。だからね、君には赤ん坊に戻ってもらうよ。大丈夫。成長したら自然と今

の記憶を取り戻すから」

既に異世界への移動は始まっているようで、完全に停止した世界が突如、まばゆく真っ白に輝きだした。

一方、少年は、ネズミの思わぬカミングアウトに驚きつつも、今更「嫌だ！ やめて！」とは言えないので、ただ呆然と戸惑っているだけだった。

そうこうしているうちに、時空移動は着実に進み、彼の意識は、彼方の先へと消えていった。

英雄になれ！

世界を救え！

物心がついて間もない少年の脳裏に、そんな言葉がしきりに飛び交っている。

少年は今、レオンハルト・ノエル・サンジユストと名乗っている。五〇〇年の長きに渡って戦乱が続いているただっ広い銀河系で、辺境の惑星アストレアと若干の衛星を必死に守りぬいている小国ヴェスパニア王国の最下級貴族であるサンジユスト家の嫡男として育った彼は、頭の中に飛び交うそんな不思議な言葉に悩まされている以外は極めて普通の少年でしかなかった。普通の小学校に通い、普通の中学校に通い、普通の高校に通っている。

そして、高校卒業後、彼はヴェスパニア王国宇宙軍士官学校に入学することが正式に決まっていた。まあ、別に行きたくて行くというわけではなく、主として金銭的要因で大学に行けなかったがゆえにやむなく行くに過ぎない。士官学校に入れば、相応の知識も得ら

れるし、学費は免除だし、学生寮で集団生活を送れば食費も寮費も水道光熱費も無論無料。何より給料が得られるという点が大きかった。しかも、文民による支配と、学歴至上主義が徹底しているヴェ

シヒリアン・コントロール

スパンニアにおいて、軍人の社会的地位は極めて低く、軍人志望者も非常に少ないので、ひとたび決意してしまえば、士官学校に潜り込むことはそれほど難しい話ではなかった。

こうして何とか進路も決し、安堵していたレオンハルトのもとにある日、真っ白な毛並みを誇るネズミが唐突に姿を現し、

「さあ、準備はできたかい？ 英雄になってこの荒んだ世を救うんだよ。僕達のこの国を絶望から救うんだよ」

と、言った。

「なんのことだ？」

ヴェスパンニア王国において……というよりこの銀河系においては、人語を操る小動物などというものは決して珍しくはない。レオンハルトも、これまでに何度も人語を自在に操る動物を目にしているから、ネズミが喋ろうと、別段驚きはしなかった。

だが、ネズミが口にした言葉の内容には、驚いた……というよりはむしろ、何を言っているのか、言葉の意味が容易く理解できなかった。

「ん？ あれ、おかしいな？ まだ記憶が戻ってないの？」

ネズミは困ったように首をひねりながら考え込んでいる。

「記憶？」

レオンハルトは意味が分からぬと言わんばかりに、ぎろりとネズミを睨みつけていた。

「うーん。僕のシナリオ通りに士官学校に入ってくれたから、絶対に記憶は戻つてると思ったのに。まあいいや。経過はどうあれ僕のシナリオ通りだし。……というわけで、レオンハルト君。君には、契約通り世界を救ってもらうよ。英雄になってもらうよ。」

「え、英雄？ け、契約？」

「うん。ちなみに、契約不履行の場合は、死んでもらうよ。」

可愛らしい顔をして、可愛らしい声色で、随分と恐ろしいことを平然と言つてのけるネズミを前にしてレオンハルトは言葉を失つたが、しかし彼は戸惑っている。

そもそも、英雄になるとか、世界を救えとか、そんな話を聞いたこともないし、当然契約したことなどないはずである。少なくとも彼の記憶の中ではそうだった。

「うーん、記憶が戻ってないつてのは僕の計算違いだったなあ。でもまあいいよ。いずれどうせ記憶は戻るんだから、それまでは契約執行は保留にしておいてあげる。でも、一応、いつまでも記憶が戻らないのは困るから、これから僕が君を監視してあげるね。戻りそうもなさそうだったら、記憶なんてどうでもいいから契約の執行を迫ってあげるから。」

全くもって、言っている言葉の内容と口調が、純真無垢で無害っぽい外見とミスマッチだった。

レオンハルトは戸惑いを隠せなかったが、それは別にミスマッチそれ自体に対してではなく、この天使のような小動物がもたらしてくれたとんでもない言葉の中身にある。契約とか、契約不履行の場合は死、などと穏やかならぬ言葉もそうだが、英雄になれとか世

界を救えとか、このネズミは正気で言っているのだろうか。まあ、確かに今の銀河は五〇〇年も飽きることなく戦争をやってきて、人々は英雄の登場を待ち望んでいるし、そもそもヴェスパニア王国自体が、東の超大国ジュピウス帝国に虎視眈々とつけ狙われていて、危急存亡の秋にある。

だが、そんな危機は、もっと偉い人が何とかしてくれるだろうし、五〇〇年も続いた戦乱が、今更何とかなるとは思えない。英雄の登場程度で何とかなるほど、銀河は狭くない。銀河は広すぎるのだ。そして人口は多すぎるのだ。戦いのない世の中など絶対にあり得ない。

「ま、今は別に君のやりたいようにやってくれればいいよ。いずれ僕が助言することになると思うけど、今の現段階では見守るだけだよ。でも、君は英雄にならないといけないし世界を救わないといけない。そのためだけに君は今ここにいるんだからね。あ、そうだ。そう言えばまだ僕、名前を名乗っていかなかったね。僕の名前は、コタローって言うんだよ」

「こ、コタロー？」

どこかで聞いた覚えのある名前だと、心のどこかで思いつつ、レオンハルトはジツと、このわけのわからぬ小動物を見つめていた。英雄になれ。世界を救え、とこいつは言う。そして、その契約が果たせない時、自分は死ぬという。なんとという無茶ぶり。なんという理不尽な話だろう。

これまでこの荒れた世界を救おうと、何人の男たちが現れては消えていったかしかない。英雄にはなれるかもしれないが、世界を救うなど無理なのだ。もしも本当にそれが可能ならば、なんで五〇〇年も銀河は戦争状態を続けていなければならなかったのだ。仮に銀河系に平和をもたらすことができるのだとしても、少なくともそれは自分じゃない。

「ま、君は英雄にはなれるよ。そういう定めのもとに生まれたんだからね。でも世界を救えるかどうかは君たちの努力次第だよ」

そんな風に言いながらコタローは軽やかな仕草でレオンハルトの足と体を伝って肩に登り、耳元でクスクスと笑っていた。

こうしてレオンハルト・ノエル・サンジュストの？英雄としての人生？は始まりを告げた。彼自身、よく分からないうちに、世界を救うというとんでもない使命（全うできなければ死）を負わされた哀れな少年は、ハアと深いため息を吐いてから、高校への道のりを急いだ。

第1話 不良なエリート

「ち、遅刻だあああ」

あれから五年。

目覚ましに叩き起こされて、ベッドから飛び起きたレオンハルトは、慌ただしく洗面所にすっ飛んでいつて顔を洗い、歯を磨き、パンを食べようとして……そこでふと気が付いた。今さらどれだけ急いだところで遅刻を免れる手はないのだということに。

「ま、しゃーなーか」

そんな一言を吐いた後、彼はゆっくりと食パンを喉の奥に放り込み、そして再びベッドの中に潜り込んで二度寝を決め込むことにした。体が睡眠を欲している以上、健康第一主義のレオンハルトとしては、その要求に素直に従うしかないのだ、と言い訳しつつ目を閉じると、あっという間に睡魔が押し寄せてきて熟睡モードに突入した。

そして、今度は目覚ましに叩き起こされるのではなく、自然と瞼が開き、意識が回復した。これぞまさしく人間らしい生き様だな、と感慨に浸りつつ、おもむろに時計に目をやってみると、既に十時半を指し示していた。士官学校の第一時間目は八時半開始だから、既に二時間も遅刻している計算になる。携帯電話を手に取ると、学校や教官からの着信履歴が一分おきぐらいに残されていた。

「……これで今年に入って六度目の遅刻だね。教官たちはカンカン

だろうね」

入学から五年。最終学年である五回生となり、来年は卒業だ。普通であれば……。

成績面では、レオンハルトはまあ落第生ではない。小型戦闘艇マウリアの操縦技能試験では、学校史上最高のSSSをとっているし、そのほかの科目も、まあまあ及第点だ。単位数も卒業要件を満たしているから、このままいけば、来年は無事卒業し、少尉として宇宙軍に配属されるはずであった。

しかし、

はつきり言って彼の生活態度は最低だった。何しろ、今年度に入ってからまだ一ヶ月しかたっていないのに、今日で六度目の遅刻をやらかしているのだから。規律と秩序を徹底的に重んじる軍の学校で、遅刻に限らずあらゆることで時間を破るといっものはご法度中の御法度なのだった。

無事卒業するには、卒業要件単位数を満たしていることと、担当教官の承認を必要とするが、彼の生活態度では、後者が非常に危ういのである。

だからこそコタローは呆れたような顔で、レオンハルトを見つめている。

「別に構わんさ。もうどんな御説教もへっちゃらだし。幾ら罵声を浴びせられようと、いくら暴力をふるわれようと、拷問室に閉じ込められて一日二日を過ごそうと全然へっちゃらさ。この五年で、いったい何度そんな目に遭っていると思っっているんだい？」

胸を張って言えるようなことではないが、レオンハルトは確かにその手の罰則には慣れっこと豪語できるほどに経験豊富だった。それは、この五年、常に彼の側につきつきりだったコタローには良く分かつている。

「五年の軍生活で学んだことが罰に耐え抜く力だけ……だなんて情けない話だね」

と、コ タローが言うと、

「フン。型にはまった英雄なんて面白くないだろ。英雄つてのは常にアウトローな生き物なんだよ。それに学校は俺をクビにはできないよ。何しろ俺は学校史上始まって以来の最強のエースパイロットなんだから」

レオンハルトは今度こそ本気で胸を張った。

「ま、君の場合はまさにそれだけしかできないからね」

苦笑いするコ タローに、

「器用貧乏よりだいぶマシだろ」

レオンハルトはすかさず言い返した。

「まあね。あ、それはそうと、そろそろ行かないとさすがにまずいんじゃないかな」

「ん？ あ、まあそうなんだけど、二時間も遅刻しちゃうと、もうどうでもいい気がするんだよね。二時間も三時間も、大遅刻であることに変わりはないし」

「……相変わらず素晴らしい考え方だね。まさに英雄として相応しいね」

「だろ。最近思っただ。俺には英雄となる才能があるんじゃないかってね」

「……」

一ヶ月で六度も遅刻した……だけでなく、授業中のお喋り、居眠りは日常茶飯事という、とんでもない不良少年が、そんな自分の生活態度を誇って「自分には英雄となる才能があるんだ」と豪語するのだから、呆れてものも言えぬとはまさにこのことだろうとコタローは他人事のように思った。

家を出て、しばらく歩いていると、

「あらレオン、奇遇ね、こんな時間にこんなところで」

唐突に姿を現し、声をかけてきたのはエレナ・アイドルという名の少女であった。年齢的にはレオンハルトと同じ年ぐらい。鮮やかに輝く金色の髪と、すらっとした体型が特徴的な美女だが、美人過ぎるのがいけないのか、とにかく近寄り難いオーラが出ているために、これまで浮いた話一つない鉄の女であった。まあ性格的にも非常にきついで、彼女の相手をまともに行えるのはレオンハルトぐらい……というのが密かな下馬評であったりするのだが、それは当然のレオンハルトの預かり知らぬ噂話。彼は彼女の姿を見るなり面倒臭そうにため息を吐き、がっくりと肩を落とした。

「なによ、その態度。まるで世界の終わりでもきちちゃったみたいなのツラね」

そうエレナは言ってレオンハルトの背中をぽんと叩いた。

「フン。ほっとけ。それよりもお前の方こそ何やってんだよ。もう講義は始まってんだぞ」

エレナもまた王立士官学校五回生である以上、こんな時間にこんなところでうるうるしていたら確実に遅刻のはずである。改めて時計を見ると、朝の十一時を指し示していた。講義の開始が八時半だから既に二時間半というとんでもない時間が経過している計算になった。

「あんたに言われたくないわよ」

エレナはそう言って近くの店で買ってきたと思しきアンパンを美味しそうに頬張っていた。

「ま、俺の場合は例によって寝坊なわけだが……」

「寝坊？ ふふふ。どうせまたあんた、夜遅くまでゲームでもやってたんでしょ」

「ふん。悪いか」

「いや、別に。消灯時間を過ぎてもおゲームだなんて、根性があるというかバカというか」

既に大遅刻確定の二人は、迫りくる大説教の恐怖に怯える風もなく、いつも通りの足取りで校舎の方を目指していた。まあ、彼らにとって遅刻は今日が初めてのことではない。こと、遅刻に関しては常連と言ってよいほどマスターしている二人なのだ。それに、士官学校で五年も過ごしていると、既に教官の体罰を含めた説教など、クソほども怖くないのだった。

「で、お前はなんで遅刻したんだよ。例によってパン屋巡りか？」

嬉しそうに頬張るアンパンを見て、レオンハルトは呆れ切ったような顔で、ため息を吐いた。

「そうよ」

そんな彼など無視して、エレナは大きく頷いた。

「大体、この辺りのパン屋は日によって味が違い過ぎるのよ。ったく、統一性があればどこで買うかあらかじめ決め解くこともできるけど、毎日毎日違うときたら探すしかないじゃない。同じお金を出すんだもん。一番美味しいパンじゃなきゃ勿体ないわよ」

そう言うエレナと一緒に、レオンハルトは一度だけパン屋巡りというものに突き合ったことがある。そのときのエレナの態度は、店にとってはまさに最悪といってよいものだった。

何しろ、不味ければ不味いと、その場で平然と言つてのける上に、不味いからというたつたそれだけの理由で強引に返品させるからだ。一度、口をつけた食べ物、再び売り物になるはずはないから、返品に応じた店が自腹を切つて廃棄するしかない。無論、本来、一度口をつけた商品の返品に応じてくれる店などないのだが、

「もし返品に応じないなら、この店のパンは不味いつて言いふらしてやる」

と、脅しにかかるので、店としては応じざるを得ないのだった。実際、彼女の脅しに屈することなく敢然と返品交渉を拒んだ勇氣ある店は、その直後に行われたエレナ・アイドルによる徹底的なネガティブキャンペーンのために閉店に追い込まれてしまっている。当然、店側はエレナや士官学校に猛烈に抗議したが、

「不味いものを売っている方が悪い。抗議するよりむしろ良い商品売り出せるように、開発に力を注ぐべき。もし訴訟したいなら勝手にすればいいわ。私自身が弁護士役も兼ねて論破してくれるから」

そう言っつて、全く聞く耳を持たないのである。そしてその店は、家庭裁判所に訴訟を起こしたのだが、宣言通り自ら弁護士役も兼ねたエレナに論破され、見事に敗訴してしまっていた。

以来、彼女は軍事都市に立ち並ぶ商店主たちにとって恐怖の代名詞となっている。

彼女が返品を求めてきたら、触らぬ神に祟りなしとばかりに返品に応じざるを得なかったのだった。

「また何人ものパン屋の主が泣いているんだろっつな」

と、レオンハルトが呆れたように呟くと、

「泣いてる？ この程度で涙するんだつたら店なんて畳んでしまっただろうが身のためよ。私が、わざわざ不味いつて指摘してあげてるんだから、頑張つて精進して私の舌を唸らせるパンを作ればいいのよ。そうしたら私だつて返品なんてしないし、美味しいつて宣伝してあげるのに。私の手にかかれば、店を閉店に追い込むことだつて、逆に繁盛させることだつてお茶の子さいさいよ」

エレナは全く罪の意識を感じてはいないようだった。そのあまりに凶太すぎる神経に、レオンハルトは呆れつつも、尊敬に近い感情を抱いてしまうのだった。

そうこうしていると、レオンハルトとエレナの二人は、士官学校の校門前までやってきた。

時計を見ると、既に十時近い。

本来ならば、とんでもない大遅刻なのだが、彼らは全く気にする素振りすら見せない。

完全に締め切られた門を平然と乗り越え、二人は下駄箱の方へと歩いていった。

透き通るような、ガラス製の自動ドアの前には、阿修羅のような顔をした二人の教官が腕組みながら立っていて、殿様出勤ならぬ大遅刻登校をやらかした二人の生徒をぎろりと睨みつけていた。

「あ、シュペール先生。カイル先生。おはようございます」

全く怖がる風もなく、挨拶してのけるレオンハルトとエレナに、二人の教官は呆れたように苦笑いしつつ、すかさず表情を元に戻して、こう言った。

「お前らは、今何時だと思っているんだ？」

と、シュペール教官が尋ねると、

「十時ですが？」

罪の意識皆無のレオンハルトが答えた。

「十時だ。十時。で、講義の開始時間はいつだ？」

今度はカイル教官が、眉をぴくぴく震わせながら問うと、

「八時半ですよ。忘れたんですか？」

怒りを呷るような、挑戦的な口調で答えるエレナ・アイドルであった。

「……一時間半の大遅刻だ。……お前ら、分かってんのか？ お前らはな、学生であって学生ではない。給料をもらって働く社会人であり、軍人なのだぞッ！ 規律に従わぬ軍人が混ざった軍など、戦場ではクソほどの役にも立たぬ。それが分かっているのかッ！」

既にこの二人には、何度も何度も同じような話で説教し続けてきた。これでもかというほどに罵声も浴びせたとし、暴力もふるった。しかし、二人の生活態度はいつこうに改まることはなく、相変わらず五年生にもなっただけの有様だった。

もはや怒る気力も失せたと言わんばかりの二人の教官を前にして、
「分かってますよ。寝坊したんですよ」

レオンハルトは悪びれずに答えた。

「ね、寝坊……。そうか。寝坊……。エレナ・アイドル少尉。お前もか？」

シュペール教官の問いに、エレナも静かに頷いた。まあ、さすがにパン屋巡りをしている遅刻しましたとは言えないエレナである。

「貴様らには、もはやどんな罰則も無意味とみた。……寝坊が理由で遅刻したならば、今夜は寝坊できぬようにしてやる。今度、軍

から練習用に、退役した戦艦が我が校に与えられることになったが、今夜中に、少なくとも艦橋部は全部、埃一つないほど綺麗にしてあげ」

と、シュペール教官が言うと、途端に二人の表情が一変した。

「今夜中って……。ま、まさか夜ですか？」

レオンハルトが恐る恐る尋ねると、

「当たり前だッ！ 寝坊するといふならば、眠らせぬだけだ。徹夜して掃除しろッ！ それが空前の大遅刻者に対する罰だ！」

二人の教官は口を揃えてそんな風に怒鳴り、吐き捨てた。

レオンハルトとエレナは、大問題児であるが、こんな二人がなおもクビになることなく士官学校に籍を置くことができているのには当然わけがあるのだった。

エレナの場合、生活態度は極めて不良なれども成績は非常に優秀だった。それこそ、士官学校始まって以来の俊英と言われているくらいである。戦史、戦略、戦術、歴史、語学、数学、国語などありとあらゆる科目で彼女はSSSパフォーマンスの成績をとっているだけでなく、体術も、戦闘シュミレーションも何もかも最優秀の成績を誇っていた。特に、ヴェスパニア王国とその周辺諸国で構成されるアストレア条約機構加盟各国の士官学校生によって行われた戦闘シュミレーション大会にて優勝し、その名を轟かせて以降、彼女をクビにすること

を軍上層部が認めないようになっていたのだった。

レオンハルトはというと、学業成績面では劣等生だが、唯一、ヴエスパニア宇宙軍が誇る小型戦闘艇マウリア乗りとしては超一流の実力の持ち主で、アストレア士官学校屈指のエースパイロットとしてそれなりの知名度を誇っているのです、エレナ同様、軍上層部の意向によりクビにできなくなっていたのだった。

けれども、学校当局にも彼らに罰則を与える権限ぐらいはあるわけ……。

二人は今、真つ暗な艦内で、忙しなく掃除にうつつを抜かしていた。箒とチリトリ、雑巾を手に動きまわる二人の少年少女……という構図は極めて滑稽で、二人はずっと愚痴ばかりであった。

「ったく、あんたが遅刻するから私までこんな目に……」

と、エレナが言うと、

「俺は寝坊して遅刻しただけだ。別に確信犯じゃない。ちゃんと起きることさえできていれば遅刻する意思はなかったんだ。けどお前の場合はパン屋巡りって、確信的な理由で遅刻したんじゃないか。お前の方が罪は重いね」

レオンハルトはすかさず反論する。

「フン。寝坊ね。でも寝坊したのはあんたが夜更かしたからですよ。要するにあんたも十分確信犯よ。しかも消灯時間中にゲームとかやってたんでしょ。私よりもあんたの方が罪は重いわよ」

「……何言ってるんだよ。消灯時間で、電気もない状況下で、如何に電気を盗み取ってゲームをするかが楽しいんじゃないか」

「……」

呆れるエレナを無視して、レオンハルトは面倒臭そうな顔をしつつ、清掃作業を続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2734ba/>

俺は銀河を救えるか？

2012年1月7日02時48分発行